空間・社会・地理思想 13 号，95-113 頁，2010 年
Space, Society and Geographical Thought

フランデレンにおけるアンチ・アーバニズム
—階級闘争における空間戦略の政治・社会的帰結—

クリス・ケストゥロート*，フィリップ・ドゥ・マーシャルク**
（ヒェラルド・コルナトウスキ***，本岡拓哉**** 訳）

Kesteloot, C., & De Maesschalck, F,
Anti-urbanism in Flanders: the political and social consequences of a spatial class struggle strategy,
Belgeo, 1, 2, pp. 41–62.

フランデレン地方においては、階級闘争が結果として都市への反抗的な姿勢を導くことになった。ワロンで起こった産業革命は、その後、フランデレンの産業化を引き起こしたが、その中で教会とブルジョワジーは交通政策や住宅政策を通じて、労働者を都市から隔離し、世俗化（教育の宗教からの分離）と社会主義の台頭に前もって対処することができた。これは、主に都市部でリベラル派と社会主義者が分断するなか、フランデレンでは伝統的キリスト教派が政治的覇権を握っていたことを説明している。本稿後半部では、1999年に行われた議会選挙結果の地理的な状況を考察している。アンチ・アーバニズムの観点から鑑みると、この選挙は重要な空間的転換をもたらしたことがわかる。フランデレンの中心部において、キリスト教人民党(CVP)がフランデレン自由民主党(VLD)に取って代わり、都市部においては、社会党への投票率が減少する代わりに、フランデレン環境政党(Agalev)とフランデレン極右政党(Vlaams Blok)に票が集まっている。また、後者は郊外周縁部や非都市部においてより成功を収めている。そして本稿の後半部では、アンチ・アーバニズム文化の退行的効果とともに極右に対する闘争によって、フランデレンの政治課題よりも都市政策が上位に置かれざるをえなくなっていることを論じている。

キーワード：アンチ・アーバニズム、政治地理学、フランデレン

はじめに

産業における労働人口とサービス業から測定すると、フランデレンは世界において最も都市化した地域の一つである。しかし、フラマン人は大都市が何たるかを把握していない。ブリュッセル Brussel に毎日通勤している 20 万人にとって、都市とは汚く、異質であり、危険な存在なのである。かれらは会社から駐車場や駅までの往復の道しか知らない。3,000 人の若者達がブリュッセルの EHSAL（経済カレッジ）で学んでいるが、その内、下宿に住んでいるのはたった 600 人である。そして、その下宿すらもブリュッセルではなく、ほとんどがルーヴェン Leuven やヘント Ghent にある。かれらは「ブリュッセルは巨大で、治安が悪く、物価も高い」という考えから、下宿からブリュッセルの通学時間や交通費の負担を惜しまない。学生たちのレポートを分析すると、コルトレイク Kortrijk にあるルーヴェン・カトリック大学の学生は、コルトレイクは勉強するのによいところであり（なぜなら皆がお互いのことを知っているから）、さらに、迷い易く、治安や安全を欠いている大都市よりも素晴らしいと説明している。学生たちにとって、大都市とはルーヴェンのことであり、ブリュッセルはおそらく地獄というイメージしかないであろう。

フランデレン政府[1]はアントウェルペン Antwerp やメヘレン Mechelen ではなく、ブリュッセルを首都に選ぶ時に慎重になっていたが、今となれば、それは結局、たかだがブリュッセルのフラマン人に対する施設の提供やある種のリップサービスにすぎなかったのである。実例として Social Impulse Fund をあげると、フランデレン共同体は社会的排除に対処するため、地方自治体に 70 億フランを提供しているが、そのうちアントウェルペンに 20 億フラン以上、ヘントに 10 億フランを与えているのに対して、ブリュッセルには数億フランしか与えていない[2]。郊外化の影響で、ブリュッセルのフラマン人は絶滅しつつある。フランデレン議会で行われたブリュッセルのためのフラマン政策についての聴聞会において、先導するフランデレン文化運動の有力者は、ブリュッセルの開発の停止（まずはその国際的機能）や、共同消費の全部門においてフラマン語の

＊　ルーヴェン・カトリック大学
＊＊　ルーヴェン・カトリック大学
＊＊＊　大阪市立大学・院
＊＊＊＊　大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員

みの施設を提供することによる、ブリュッセルのフラマン人の保護を訴えた。フランデレン極右政党(Vlaams Blok)も同意見であり、ブリュッセルを、貧困のフランス語圏のブリュッセル出身者がフラマン人の気前の良い支援を受けることができるような保護地域に格下げすることを望んだ[3]。この場合、フラマン語圏のブリュッセル出身者がフランデレン極右政党に多くの投票をすることで、ベルギーの連邦制モデルを弱体化させることになる。フラマン人のだれも、増大しつつあるブリュッセルの国際的なカリスマ性がフラマン人の解放に有用であるとは思っていない。なぜならブリュッセルの文化はフラマン語圏の都市を超えて、コスモポリタン的，多文化的状況との相互関係の中で反映していると思われている。

明らかに、都市に対する反抗的な姿勢がフランデレンにおいて広がっており、それは大きな都市に行くほど強くなっており、ブリュッセルがもっとも顕著となっている。もちろん、共同体間の関係もフラマン人のブリュッセルへの嫌悪感において重要な役割を担っている。ベルギーの歴史的コンテクストを見ると、ブリュッセルが強烈なフランスの文化受容のための強力なマシーンであることを認識できるが、それはまた郊外化が進展する中、ヴラームス・ブラバント Vlaams Brabant 州にも広がりを見せている（Sieben,Witte and Dockx in Witte,1993）[4]。しかし、ブリュッセルは巨大都市であり、そこでは都市文化が活発で、世界にアクセスしやすく、特に地方の発展よりも世界経済に対応するために策が練られることが多い場所なのである。港があるためにブリュッセルとアントウェルペンが似ているといわれることもあるが、この観点からいえば、ヘントはただの地方の中心都市にすぎない。

本論文では、ベルギーの階級闘争の地理的な側面で見出されるアンチ・アーバニズムの原因を検討し、そこでの選挙および社会政治的な帰結について明らかにしていく。後半部では、直近の議会選挙の地理的現象に触れながら、反都市的姿勢すべてに対して、なぜ都市政策がフランデレン政府の重要な政治課題の上位に位置づけられるかという問題の原因を考察していく。

フランデレンにおけるアンチ・アーバニズムを起因とする階級闘争

フランデレンにおける反都市的姿勢の起因は 19 世紀の産業革命とその結果としての地理的状況に遡ることができる（Saey et al, 1998）[5]。産業革命はまずワロンにおいて発展し、そこでは石炭鉱業に関係のある工業軸の開発が引き起こされた。こうした工業化過程の地理的結果は都市よりも地方で見られたが、工業化と労働者の空間的集中がいかに宗教の世俗化と社会主義労働運動の成長に伴っているかは明らかである。

19 世紀からしばらくするまでは、製造業に比べ、内職が支配的であった繊維産業を別とするならば、フランデレンにおける工業化と都市化は遅れていた[6]。同時に、ブルジョアジーと教会はこの運動の危険性を予知し、新しい手段を行使しはじめた。政治のレベルでは、教会は 1891 年の法王の回勅 Rerum Nobarum に代表されるように、自らのカトリック労働運動を利用し、社会労働運動に対抗することが出来た（Joye & Lewin, 1967; Gerard, 1998）。この策略はベルギーの社会をカトリックの柱と社会主義の柱に分割する起源であった。カトリックの労働者は労働者だけではなく、カトリックコミュニティのメンバーとしても扱われ、カトリックの柱（ブロック）の利益に対して脅威がある場合には、動員源としてのカトリックの施設や組織にも帰属させられた（ベルギー史において最も成功した動員がカトリックの教育に関係していた）。ただし、フランデレンにおける生活世界やメンタリティの形成はともに、大都市における労働者の空間的集中の制限を目的とした、カトリック教会の努力があったからである。この点に関して、相互関係的な二つの措置のタイプが重要であった。すなわち一つは、労働者のモビリティの増大であり、もう一つは都市の外部での持ち家促進であった。社会主義者の目的とは違って、カトリック教会の策略では集団的価値よりも個人的価値が、労働階級よりも家族が、都市よりも家庭が重要なものと位置づけられていたのである。

1869 年には、労働者を対象とした安価な鉄道のシーズンチケットが導入された。鉄道での通勤は 19 世紀の終わりまであまり発展しなかったが、こうした措置は当時の階級関係を説明するものである。すなわち、労働者は田舎より都市で高い賃金を手に入れることができ、鉄道のシーズンチケットのおかげで交通費の負担は軽減され、都市における高価な住宅を購入する必要もなくなった。さらに、かれらは収入を補うために、自宅の庭で野菜を栽培し、少なからず備蓄することもできた。こうして、貧しく、衛生状態が劣悪で、政治的にも危険であった 19 世紀の都市への集中が緩和されていったので

ある[7]。一方で、雇用主の視点から見ると、労働者を農村に分散させることは、労働者の共有意識を妨げ、教会や地方の要人の支配下状態を維持させることになった。とりわけ後者は土地賃借料から利益を得ることになった。また、田舎において自給するという見込みは、雇用主が払わなければならない失業保険のようなものだった。労働者は自分自身で作った食糧の価格を食費に含む必要がなくなったために、雇用主からすれば、賃金を下げるきっかけになった。密集した鉄道網の結果として（1885年以来に敷設された多くの支線を含めて）、この措置の空間的な効果の過小評価をしてはいけない（Van der Haegen, 1984）。これはベルギーの大都市を囲む比較的、大規模な通勤圏のベースになっている（特に、ロンドンのゾーンの広さと同じぐらいであるブリュッセルにおいては）[8]。

1889年の最初の住宅法は1886年の労働者暴動（フランデレンではうまく統制され続けていた）に連なるものであった（Smets, 1977）。ここでも、カトリックの指導者たちは階級闘争に対抗するために空間的戦略を利用した。この法律は労働者に財産取得を奨励するものであった。持ち家を所有することで、労働者は資産階級の関心に共感することになり、そのうえ、住宅ローンの支払いに縛りつけられているために、ストライキを思いとどまらせることにもなった。一方で、持ち家になると家庭生活に光が当たるため、全ての家族の利益が労働者の集合的な利益よりも重要になった。そして最終的には、そうした労働者たちは（特に労働運動で重要な役割を果たすだろう、給料が良く、教育を受けた労働者たちは）、都市の労働者階級から隔絶され、彼らは自らの資金で払えるような土地代の、都市の周縁部にある近隣街区に住まいを落ち着かせたのである。

1919年に開始されたベルギーにおける社会住宅建設を特徴した田園郊外の概念は、社会主義者が原動力であった一方で、こうした過去のコンテクストでも把握するべきである。田園郊外は田舎に位置しているが、一方で、都市の諸問題を緩和し、同時に工業化の進展を促進するために都市と密接に結びついていた。社会主義者も、労働者の生活状況を改良するためには最良の手段とし、労働者を都市から離れさせる考え方を採用した。しかしながら、教会とカトリックの小学校を除いて、田園都市において全ての集団的なサービスを禁止したカトリック派と対照的に、社会主義者はこうしたサービスを自らの運動を強化する手段として見ていた。一方で、カトリック派は個々の家庭を重視し、都市からの脱出を推奨し、国内公営住宅会 Societe Nationale des Habitations a Bon Marche（仏語）– Nationale Maatschappij voor Goedkope Woningen（蘭語）が成立して以来の最も重要な住宅政策を施行することで、都市からの退去を促し続けた（Goossens, 1983）。最初は資産獲得のための補助金を提供する1922年のモーイェルスーンス Moyersoens 法があり、その後、大家族向きの低金利の住宅ローンを提供する1928年の大家庭組合 Ligue des Familles Nombreuses（仏語）– Bond der Kroostrijke Gezinnen（蘭語）住宅資金が成立し、また1935年には、失業している労働者を田舎に戻すことを推奨し、小規模な土地での作庭や栽培のインセンティブを与える（不景気の場合、失業手当の安価な代替措置として自給することを訴え続けた）小規模土地所有者国内組織 Societe Nationale de la Petite Propiete Terrienne（仏語）– Nationale Maatschappij voor Kleine Landeigendommen（蘭語）が成立した。最後に、新築費用への補助金が1948年のドゥターイェ De Taeye 法によって提供されたが、この法律はフランデレンの住宅景観を保存するもので、道路沿いの建物を取り除くか、あるいは住宅団地を農村に分散させるものであった。この補助金はそれぞれの家庭がみずから住宅を建てることで持ち家者になるように支援するものであった。戦後の住宅建設の1/3以上がこの補助金によって共同出資されたもので、そのうちの大部分は土地価格が安価なために田舎で実施された。そのほか、消費社会の空間的体現の基礎になったフォーディスム的な経済成長と郊外化がこの状況を支えることになった。実際、購買力の増大、完全雇用とクレジットの一般への普及は都市外の持ち家へのアクセスをしやすくした。この新たな住居環境は家庭を主に車や家電といった耐久消費財の消費のスパイラルに没入させることになった。こうした製品の販売の拡大は経済成長を促したのである。

したがって、「ベルギー人の胃の中の煉瓦」（すべてのベルギー人の夢は自らの家を建てるということを意味する）という伝説的なことわざは、主にフランデレン（そしてブリュッセル）の煉瓦を示している。それは我々の態度や遺伝子とはあまり関係ないものであるが、120年間に渡って、不均衡な地方開発とベルギーの社会の桂化のコンテクストにおける階級闘争への解決策として、こうした概念ができたのである。1970年後半までの効果的な都市計画の欠如は必要な空間を提供し、また、インフラを造成するケインズ主義的な熱意は、地方人口の増加と

福祉とを結びつける地方政治家の傾向と関連しており、「都市はただの職場」というフランデレンの住宅財産に対する考え方が出現する条件を生み出したのである。さらに、1959年と1970年の経済成長法は住宅団地に工業団地をその対象に加えた。その数はワロンよりもフランデレンで多かったが、ベルギーの至る所で、雇用を促進する工業団地が造成された。こうしたことにより、労働者は自らの地域で、少なくとも非ー都市人口としての意識から、仕事を求めるようになり、都市を取るに足らない場所に変容させたのである。

キリスト教の政治的ヘゲモニー

前述の分析で明らかなように、ワロンで工業軸に沿って社会主義が優勢あったこととは対照的に、フランデレンにおけるキリスト教徒の伝統的な優勢はたしかに産業革命の結果であり、教会とブルジョアジーは長い期間、社会主義を未然に防ぐための方策を練ってきた（Vandermotten et al, 1990）。

市民革命と産業革命をもたらした社会主義と自由主義は、キリスト教の戦略が完成していないか、あるいはその浸透が遅れた場所で躍進した（図1）。自由主義の本拠地となったのは、繊維工業や製糖工場、醸造所、蒸留酒蔵所などの小規模工場を経済的基盤とする小都市が存在する地方であった。こうした地域や家庭をベースとした工業は、カトリック保守主義に対抗するようなブルジョワジーを生み出し、ローカルであるが比較的持続的なヘゲモニーを作り出すことにもなった。ランデン Landen とティーネン Tienen の選挙地区やヘント、ロンセ Ronse、オーデンナルデ Oudenaarde、ローケレン Lokeren とニノーヴ Ninove はそうしたケースである。しかしながら、そのような産業化が伝統的なイデオロギー構造を破壊するような場所では、社会主義もまた顕著である。自由主義よりも社会主義は都市における現象である。すなわち、これはオーステンデ Ostend やヘントなど、特にアントウェルペンーブリュッセル軸で見られる。ルーヴェンとシントートルイデン Sint-Truiden の間のハーフェルランド地域 Hageland とハスペンハウ地域 Haspengouw は例外であり、そこでは「通勤者社会主義 commuter socialism」が顕著で、ブリュッセルやアントウェルペン、またはリエージュやその後に派生したリンブルフ Limburg 州の炭鉱などの、より運動色豊かな労働環境に日々通勤する地方の労働人口によって支持されていたのである。

他の場所では、キリスト教に基づく政治思想が優勢であった。逆説的に言えば、リンブルフ州の炭鉱盆地ですらカトリックが主流なのである。炭鉱主は、家父長的な措置や田園郊外およびそこでの施設の開発を通じて、彼らのカトリックの背景を基に、労働者を社会的・イデオロギー的に支配する構造を確立した。ハーフェルランドからの通勤者はこうした強固な領域的支配を避けてきたのであり、それゆえに彼らは運動に傾倒していった（De Rijck et al, 2000）。したがって、第二次世界大戦後のフランデレンのキリスト教人民党 (CVP) をめぐる景観は、地方の政治的実践や第一次世界大戦前からの教育構造に驚異的に補強される、強固な地政学的構造によって維持されてきたのである。

東西フランデレン州（アントウェルペンとブリュッセルを軸より西部）の大部分の地域や、アントウェルペン州とリンブルフ州のケンペン地域 Kempen（フランデレンの東北部）における国家教育は、ベルギー独立以前からの高等教育におけるカトリックのヘゲモニーを逆襲できなかった。そのため20世紀の終わりになっても、この地域はまだカトリック民主党の政治的な地盤となっている。第二次世界大戦後からはほんのわずかの政治的傾向は変動していった。2、3の選挙区における社会主義党と自由主義党の権力闘争を別にして、キリスト教人民党はリンブルフ州における重要な基盤を、社会党（SP、後に NATO 高官になった Willy Claes が党首）と VU（Volksunie 直訳で民族党：フランデレン人民連合のこと；それらの党首がフランデレン自由民主党 (VLD) に移った際に、彼を支持した選挙人全員も続いた）に奪われた。基本的に、こうした変動はリンブルフ州におけるフォーディスム的な国際投資と関係あった。この投資は炭鉱社会のヘゲモニーを破壊したのであり（Swyngedouw, 1990）、80年代後半から90年代前半の炭鉱閉鎖はこうした動向を助長することになった。

1999年の議会選挙の変動

投票に関していえば、以前の選挙でも激しい変化はあったが、特に1999年6月13日における連邦議会選挙と地方議会選挙では、選挙結果とそれに続く政党の連立において、フランデレンに最も大きな空間的変動があった（Vandermotten et al, 2001）。最近（2001年）の市会議員選挙でもこの状況が反

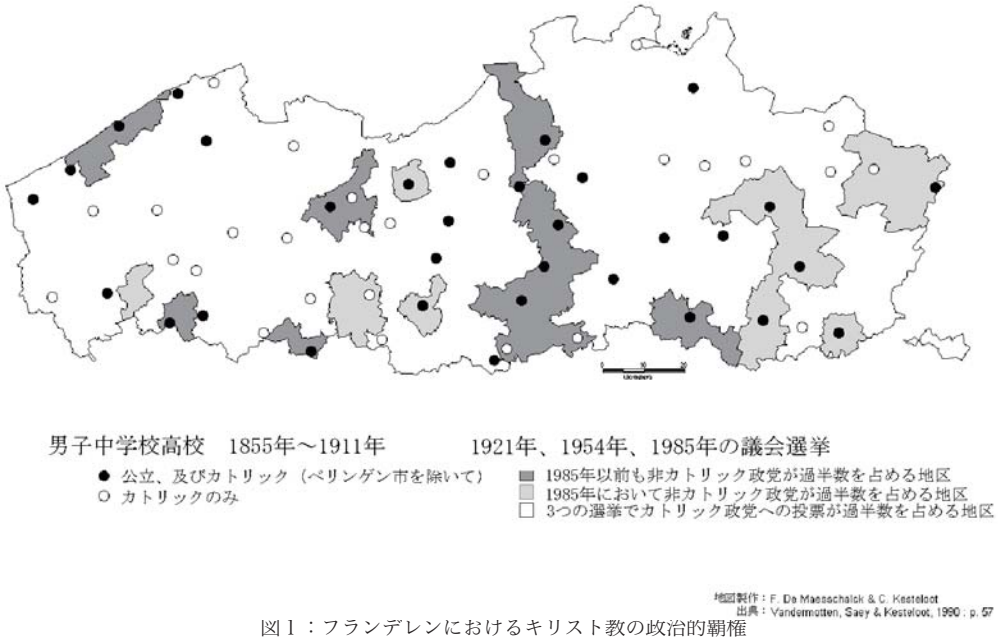

図１：フランデレンにおけるキリスト教の政治的覇権

映された。こうした変動の幅を測るために、この選挙結果の地理を伝統的なフランデレンにおける地政学的な断層と比較すると[9]、結局のところ、こうした地政学的な構造が主要な政党の成功や衰退に底流していることがわかる。ただし、ある地域のすべての場所がこの底流の影響をほぼ同じぐらいに経験しているとはいえないが、ある特定の地域におけるすべての地方政党の拠点か支配的な役割を見れば、フランデレンの政界を形成する歴史的要素を連想することはできる。

まず、その変動は対応分析を用いた、投票のおおまかな分析で示される。この多変量解析は度数分布表における関係性を視覚化することができる。より詳しくいえば、対応分析は散布図の行と列の相互依存関係を視覚化するものである。

この分析においては、行は選挙地区を、列は政党を表す。それぞれのセルは選挙区での政党への投票数を表している。したがって、行はある地区において政党への投票の分布状況を、列は一つの政党への投票の空間的分配を示している。対応分析は、行と列を共通の平面におくことで、政党と選挙区との関係を視覚化する。この次元の中心は平均状態を示している。要するに、全地域と同じような投票分布を示している選挙区は次元の中心に位置づけられる。同様に、それぞれの選挙区で全く同じ投票率である政党もその次元の中心に位置づけられる。政党あるいは選挙区が均衡状態から逸脱していればいるほど、次元の中心から離れたところに位置づけられる。同じ選挙地理を示している政党は、この平面において近接して位置づけられる。同じく、政党に対する同様の投票分配がある選挙地区もこの平面において互いに近接する。最後に、中心から同じ方向に位置づけられる政党と選挙区は共に過剰に代表されている（すなわち、その政党はその地区において相対的に多くの投票を得ており、その選挙区は他の政党よりその政党により多く投票している）。誤った解釈を避けるためには、その政党とその選挙区がその次元によく代表されているかどうかを確認しなければならない。実際、単一の２次元平面上での分布状態からだけでは、選挙区と政党のプロフィールにおけるすべての偏差を表すことは不可能である。連続する次元は順次偏差の合計（慣性またはイナーシャと呼ばれる）の内の最大の割合を説明することになるが、政党と地区が投影される平面を構成するためにたった二つの次元しか採用されないなら、うまく説明されない政党と選挙区も出てくる。この場合、その平面ではそれらの位置づけについて何らかの意義を述べることは不可能である。それぞれの要素についてのこうした説明の質は、二つの軸と全ての偏差を説明する多次元空間における各要素の位置ベクトルとがなすそれぞれの角の余を二乗することで計測することができる。二つの余弦の二乗値の合計が１である時、目下見えている平面に位置しており、したがって完全に説明されていることを意味し

ている。合計が 0 である時、ベクトルは見えている平面に対して直交し、関連する要素の距離と方向についてなにも説明することはできない。値が 1 に近づけば近づくほど、その要素に対する説明力が高くなり、そこから得られる解釈の意味はより明瞭になる（Greenacre & Blasius, 1994）。

結果を見ると、慣性の合計 total inertia は六つの次元または六つの直交軸で記述できる。最初の三つの軸のみで行と列のプロファイルに対する偏差の 83.5% を記述していることがわかる（表 1）。この三つの軸を考慮するだけでは、人民連合 (VU-ID21)[10] とフランデレン環境政党 (Agalev) を説明することは難しい。前者の人民連合党の選挙区はそれぞれの党首の本拠地に関連した、独自の地理的実態を明瞭に表している。後者のフランデレン環境政党はより弱い固有のパターンを有している。データをより詳細に検討すると、ルーヴェンの選挙区においては強い正の偏差が出ており、それは人口の社会経済的構造に対するルーヴェン・カトリック大学の影響によって説明することができる。しかし、フランデレン環境政党は最初の二つの軸によって明瞭に説明されている。三つの伝統的な政党と極右政党は最初の三つの軸によってよく説明されている。したがって、ここでは二つの平面において結果を検討することにしたい。すなわち一番目と二番目の軸で構成される平面と、一番目と三番目の軸で構成される平面である。

都市圏と非都市圏の地区を区別するため、そしてそのデータに過重な負担を避けるためにも、アーバニズムの単純な測定方法を導入した。人口密度は最も論理的な基準にも思われるが、選挙地区のサイズの違いによってそうした観念は乱されることもある。しかしながら、都市の選挙区は非都市区域を含む時には（その逆もありうる）、この選挙結果の一部は非都市的であるとも言えよう。したがって、こうしたアプローチを正当化することができる。人口の 500 人 /km² の域値を採用し、こうした域値よりも低い選挙地区を P で表示する。その結果、25 地区を都市[11] として分類することができたため、それらをそれぞれの選挙区名区で識別することにする。全ての選挙区がそれぞれの可視化された下位空間において同様にうまく説明されているわけではないが、大部分は最初の三つの軸上に明瞭に表されている。

図 2 は最初の二つの次元を視覚化している。一番目の次元は都市（工業地区）の選挙区と非都市の選挙区を区分している。都市地区のプロフィールの偏りはフランデレン極右政党の地理と対応しており、グラフにあまり明確に表されていないが、ある程度はフランデレン環境政党と少数政党の地理にも対応している。右上の象限はいくつかのアントウェルペン周辺の豊かな郊外地区、すなわちカッペレン Kapellen やコンティフ Kontich やダッフェル Duffel を含んでいる。この地域の非都市選挙区はアントウェルペンの周縁のあまり人口が密集していない地区のことである。したがって、グラフの上部はフランデレン極右政党の拠点を表示しており、この本拠地は主に都市と郊外に位置していて、それに加えてフランデレン環境政党が唯一同じ選挙区において極右政党と対面している政党であるという事実も描いている。対照的に、キリスト教人民党は非都市選挙区において多くの代議員が選出されており、こうした事実はキリスト教人民党の地政学的な位置づけを裏付けている。西フランデレン州の南部における都市選挙区は顕著な例外を形成している。すなわち、内発的経済発展が起こったコルトレイク、メーネン Menen、ハーレルベーケ Harelbeke、イゼゲム Izegem とルーセラーレ Roeselare はベルギーの大型融資およびその後の国際投資の影響を受けなかった。こうした発展は、亜麻の耕作に起源がある

表1：1999年の議会選挙の対応分析：政党ベクトルの各々の次元に対する余弦の二乗値

	第 1 軸	第 2 軸	第 3 軸	第 4 軸	第 5 軸	第 6 軸
慣性の合計（%）	43,1	24,7	15,7	9,2	5,9	1,5
CVP99	0,711	0,147	0,063	0,078	0,000	0,000
SP99	0,023	0,874	0,096	0,006	0,000	0,000
VLD99	0,051	0,026	0,919	0,000	0,005	0,000
VLBLOK99	0,878	0,017	0,015	0,036	0,053	0,001
Agalev99	0,373	0,110	0,002	0,006	0,480	0,028
VUID99	0,018	0,266	0,047	0,633	0,037	0,000
OTHERS99	0,606	0,001	0,005	0,000	0,108	0,281

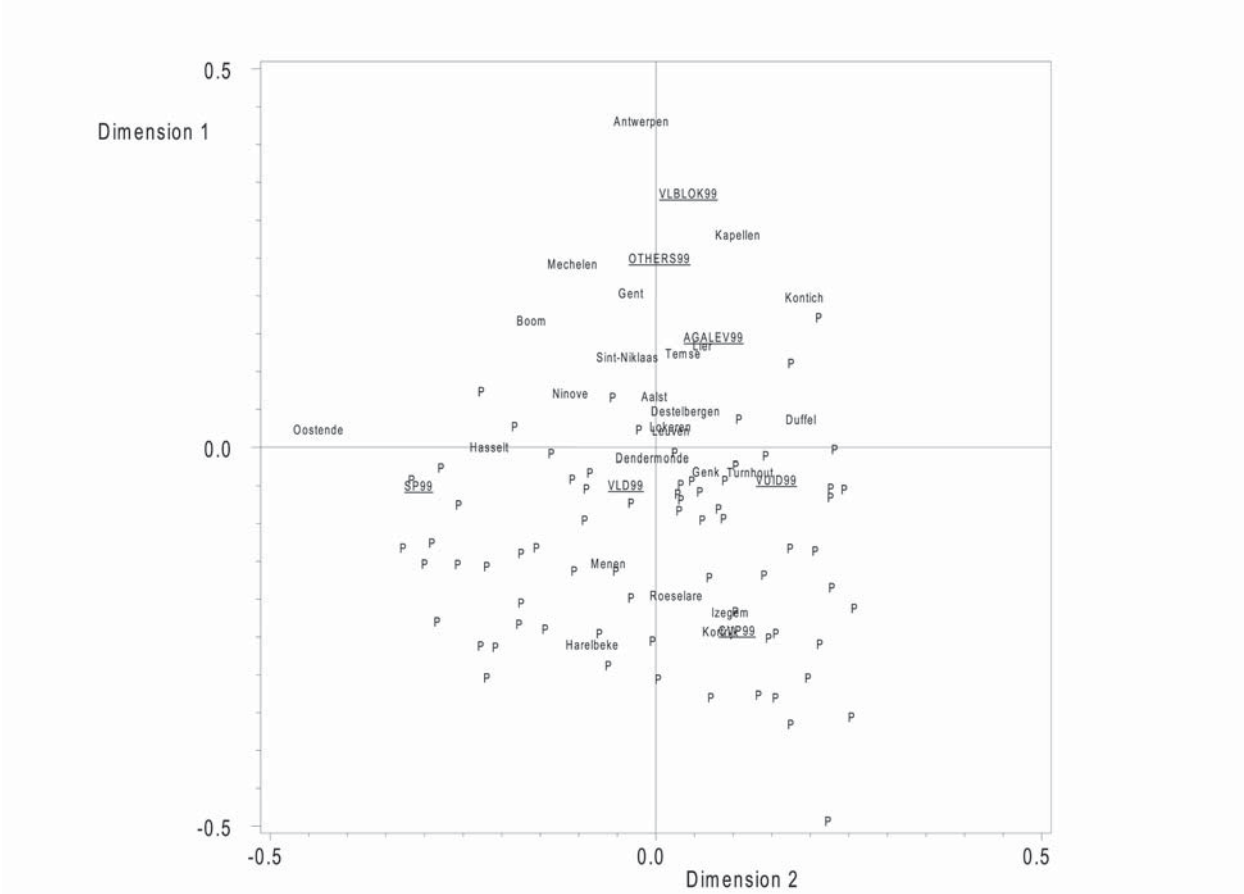

図2：1999年の議会選挙の対応分析
第1軸（Dimension 1）および第2軸（Dimension 2）における政党及び選挙地区の配置

中小企業によって生じた、キリスト教的なオーナーシップによってもたらされた。「フランデレンのテキサス」と誇りにしてきた地域は、その思想的なルーツに忠実であり続けた。

二番目の次元は、左側に社会主義志向の選挙区、そして右側には他の政党（この次元で説明されていない自由民主党を除いて）というように対比している。前述した伝統的な都市社会主義の本拠地は全て左上の象限にある。第一次元におけるそれぞれのスコアが高ければ高いほど、それはフランデレン極右政党とフランデレン環境政党に占有される。社会主義政党の布置を見ると、それらはもはやずば抜けた都市政党ではないことがわかる。もちろん、第２軸とは違って、第１軸は都市域を他の地区と区別している。要するに、かなり多くの非都市域は図の左下の象限に位置づけられる。オーステンデとハッセルトが社会主義の都市としての拠点になっているように見えるが、両者は有力な選挙候補者の存在と関係があった。

リベラル政党の選挙地理は第三次元によって明らかにされる（図 3）。垂直軸は再び第一次元であり、それは都市と非都市の選挙区を対比させている。

フランデレン自由民主党は左下の象限に表示され、グラフの中心に比較的近接している（社会党・人民連合・フランデレン環境政党の位置はこの平面においては重要ではない）。したがって、他の政

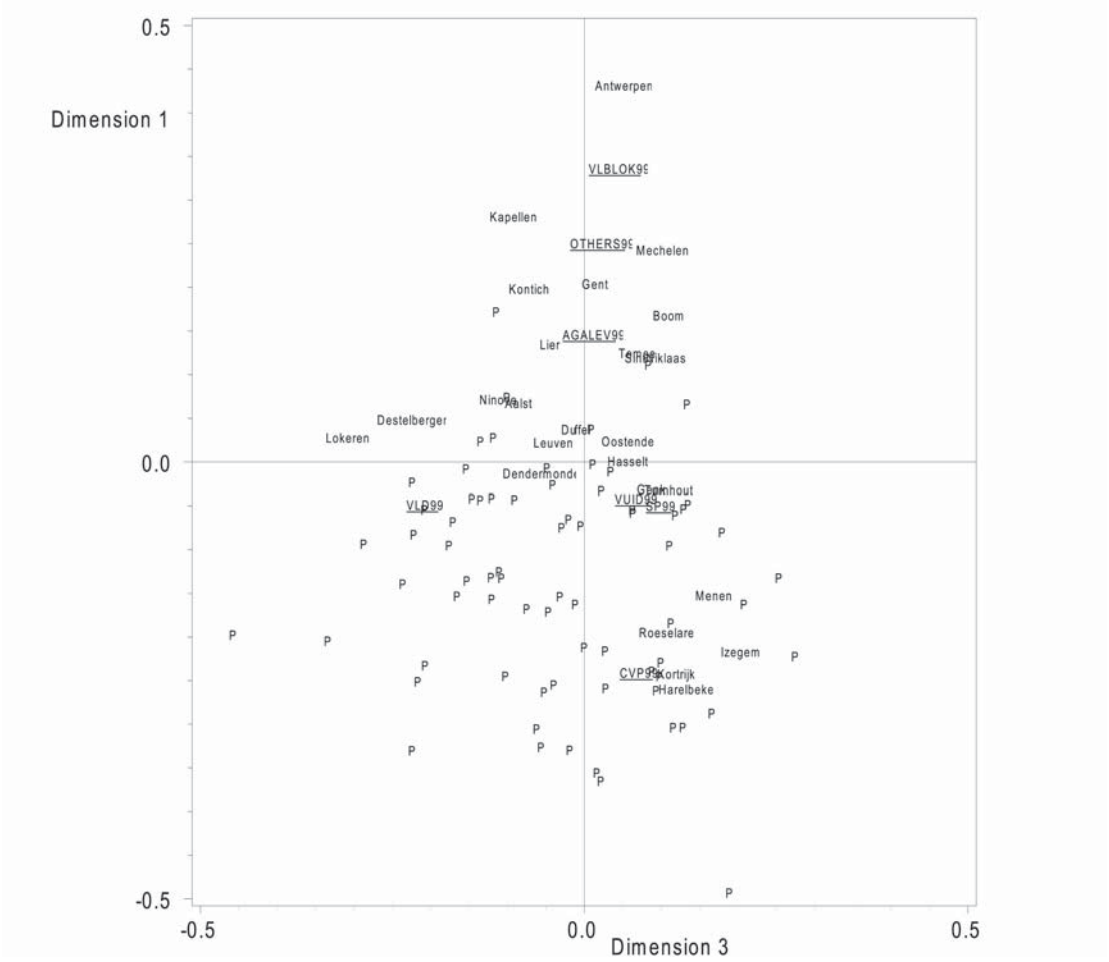

図3：1999年における議会選挙の対応分析
第1軸（Dimension 1）および第3軸（Dimension 3）における政党と選挙区の配置

党と比べると、フランデレン自由民主党は最も均等分配しているといえよう。もちろん、非都市選挙区・小都市や郊外の選挙区（デステルベーゲン Destelbergen はヘントの郊外選挙区のうち唯一都市選挙区として分類されている）の大多数には、自由民主党の代議員が過剰である。左上の象限は、フランデレン自由民主党がフランデレン極右政党とフランデレン環境政党両方またはいずれか一方に挑まれている選挙区を表している。実際、アントウェルペン周辺の郊外選挙区のすべてはこの象限に位置づけられている。ただし、このレベルでは、ハッセルト Hasselt とオーステンデの社会党の事例と同様に、ここにおいても候補者の役割、より積極的な選挙運動、そしてこの二つと深く関連する、この地域に限られた選挙演説の重要性も考慮すべきである。

長期にわたる変動を視覚化するため、1987 年の議会選挙の結果に対して同様の分析を行い、これらの次元における 1999 年の議会選挙での政党の位置を求めた。余弦の二乗値の構造は 1987 年にはあまり明らかではない（表 2）。つまり、各政党の選挙地理の特徴が複数の個別の次元にまたがってしまっている。にもかかわらず、キリスト教人民党が自ら

の次元を持っていたとしても、第 l 軸は 1999 年と同一の地理的な分極を示す。表の下部は、政党の選挙地理的プロフィールが 1987 年の状況とどの程度合致しているかを示している。人民連合 -ID 党と、それよりも程度が低いフランデレン環境政党などの政党は、それぞれの慣性が 1987 年の六つの次元にはそれほどよく表わされていないので、かなり重要な変動を経験した。しかしながら、次元間の交換によってより多くの変動も表わされている。したがって、キリスト教人民党も自由民主党も独自の次元を失っており、一般的な第 l 次元によって最も明確に表れている。なお、1999 年の結果に表れた、この次元における極右のフランデレン極右政党の著しくより低い余弦の値は、地理的なプロフィールが比較的特異なものではないことを示唆する。

第 1 軸と第 4 軸を表す配置図（図 4）はこれらの変動をより強力に描き出している。後者が選択されたのは、社会主義的志向性の強い選挙区を図の左側に位置づけている（自由主義的志向の選挙区に対比していることもある）ためである。これは社会主義志向の選挙区が同じ様に左に位置している図 2 と比較するのに好都合である。両方の次元の慣性の総計の合計が 5 割をわずかに越える程度なので、解釈は注意深く行うべきである。さらに、フランデレン環境政党や民族党などの偏差はこの平面にうまく反映されないため、ここでは考慮されていない。

1999 年の選挙を比較すると、（1987 年の選挙では）都市と非都市選挙区の二分化はそれほど明確ではない。非都市の選挙区の大多数は依然として図の下半部に位置づけられるが、アントウェルペンとその郊外、そしてメヘレンだけは図の上半部にある。これは明らかに極右への過剰な投票率と関係している。フランデレン極右政党のアントウェルペンの拠点からの拡大は 1991 年の第 1 回「黒い日曜日」に始まった。さらに、非都市選挙区は右下部の象限に集中しており、これはキリスト教人民党と自由民主党の両方及びいずれか一方への過剰代表と関係している。社会党員は 1999 年の選挙よりも都市に偏っていたようである。

1987 年と 1999 年間の変動は矢印で表示されている。それぞれの位置が完全に説明されているわけではないが、三つの変化を見いだすことができる。キリスト教人民党と社会党は明らかに中心から離れており、全選挙区に対して同じような影響力を持っていた 1987 年の状況から変化していることが示されている。自由民主党員はキリスト教人民党員が以前に占めていた位置に傾斜している。要するに、それらは着実にキリスト教人民党が占めていた位置を引き継いでいるのである。こうした自由主義への転換は疑いなく、大所帯の政治集団による良心的な中道主義を反映している。それらは社会において最も広範な中流階級の投票を得ようとしており（事実とし

表2：1987年議会選挙の対応分析

各次元における政党の余弦の二乗値及び 1999 年の議会選挙における政党

	第 1 軸	第 2 軸	第 3 軸	第 4 軸	第 5 軸	第 6 軸	慣性の列の％の合計
慣性の合計（%）	37,3	27,6	16,5	14,1	2,4	2,2	
CVP87	0,457	0,051	0,466	0,011	0,010	0,004	100
SP87	0,110	0,210	0,162	0,518	0,000	0,000	100
PVV87	0,124	0,445	0,091	0,339	0,000	0,000	100
VLBLOK87	0,910	0,000	0,026	0,039	0,003	0,021	100
AGALEV87	0,348	0,005	0,298	0,008	0,299	0,042	100
VU87	0,000	0,795	0,189	0,016	0,000	0,000	100
OTHERS87	0,595	0,001	0,029	0,032	0,097	0,247	100
CVP99	0,584	0,073	0,089	0,019	0,017	0,000	78,3
SP99	0,020	0,075	0,198	0,362	0,013	0,000	66,7
VLD99	0,314	0,043	0,058	0,226	0,019	0,039	70,0
VLBLOK99	0,688	0,018	0,027	0,019	0,004	0,002	75,7
AGALEV99	0,063	0,029	0,160	0,020	0,176	0,147	59,4
VUID99	0,113	0,202	0,040	0,009	0,003	0,002	36,8
OTHERS99	0,341	0,001	0,001	0,009	0,004	0,192	54,8

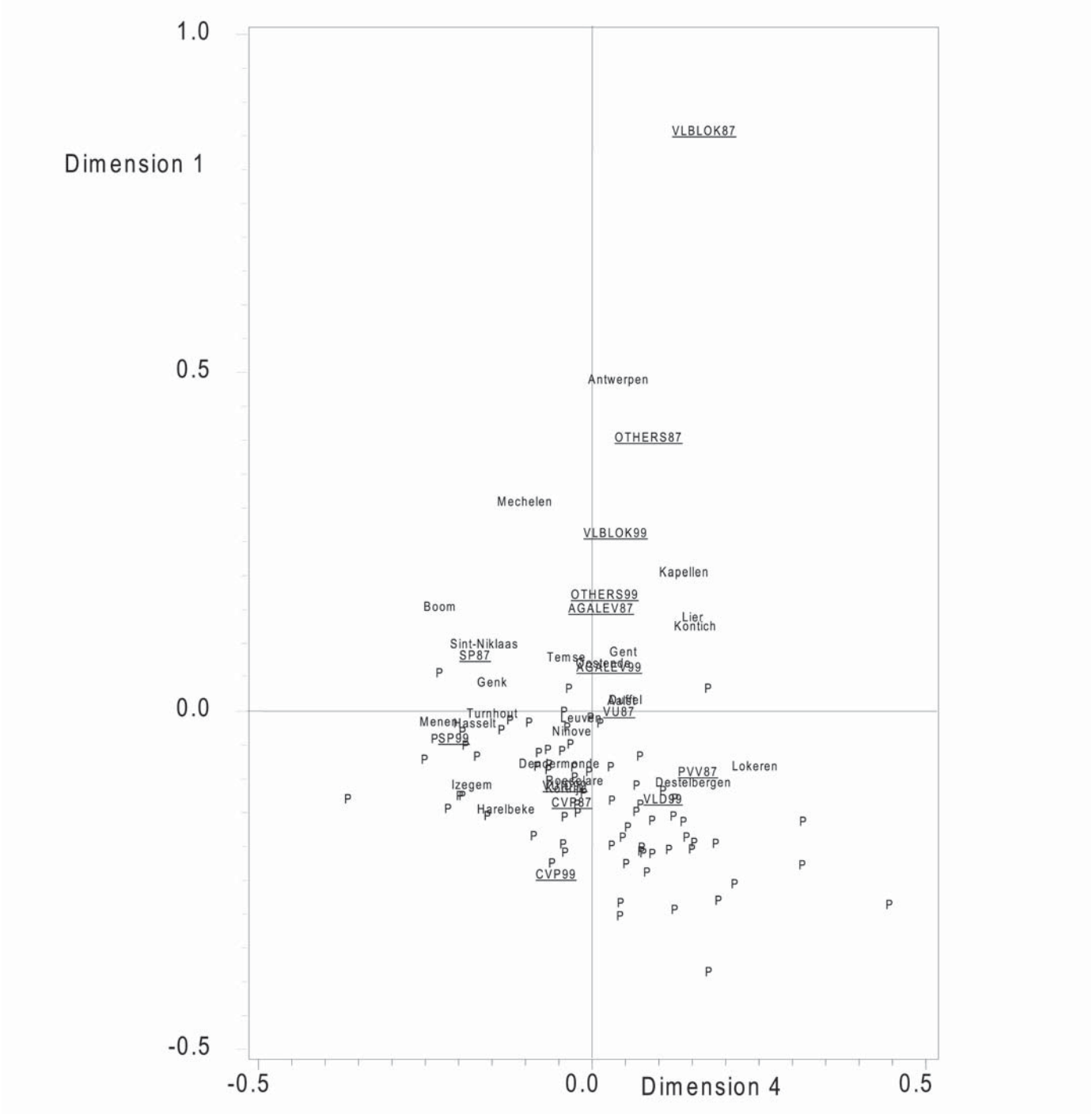

図4：1987年議会選挙の対応分析

第1軸と第4軸における政党と選挙区の配置と1999年選挙における政党の位置

て最も大規模な社会集団となっている)、したがって、私たちの社会における伝統的な社会・政治的断層を参照しながら、それらの運動の基礎を形作ってきたイデオロギーや社会モデルを守ろうとはしていない（Vanlaer, 1984)。この中心への傾斜はガルブレイスが名付けた「満足の政治」と関連している(Taylor, 2000)。投票者の大多数にとっては危機にあっても豊かな生活が維持されており、社会民主主義的なコンセンサスにおいて重要であった国家の福祉施設はもうそれほど必要とされていない。これを背景に、政党は単なる表面的な政党になったのである。彼らはかなりの程度までイデオロギーを捨てられ、同じような新自由主義的なプロジェクトに傾いたのである。全ての伝統的な政党はこうしたグローバル化における「新しい政治」を広めていったのである。こうした特に都市において著しい新しい政治およびその影響に対して、フランデレン極右政党とフランデレン環境政党が問題視している。

加えて、選挙キャンペーンの役割をマスコミやマーケティング・コンサルタントに任せることは、大規模な政党による政治メッセージの均質化を意味した。したがって、ある政治集団から別の政治集団への転向は政治的なUターンとして解釈しづらい。それはむしろ、ほとんど同じような政策を追求し続けるために、単なる政党の変化(約束された「変化」)を求めていることを反映しているにすぎない。

最後にそして最も明らかに、フランデレン極右政党が中心へと最も重要な変動を示しており、そのことは、その政党がフランデレン全体において成し遂げた成功を反映している。1991年以降、極右の発展は都市部よりも周辺部において際立っている（図5)。なお、極右政党への投票率の絶対的な拡大は1995年以降、都市部より周辺部で増加している(De Maesschalck, 2000)。

こうしたアントウェルペンからのフランデレン極右政党の拡大は三つのラインに沿うものであり、この三つはそれぞれ明確に人種差別主義に基づいている(Kesteloot & De Decker, 1992)。一つ目は、既に不安定を抱えている剥奪地域の（比較的少ないが）投票者が選挙活動の標的であり、そうした不安定な状況の原因が「移民」[12]であると主張することによって、その地域での投票を得ようとするのである（絶望からの人種差別)。したがって、フランデレン極右政党は大都市や小規模な工業都市における労働者階級地域に焦点を当てており、そうした地域においては移民がベルギーの労働者階級と混住しており、脱工業化や経済危機や社会的ネットワークの喪失の犠牲者なのである。明らかに、こうして極右は社会主義の投票を奪っている。もう一つの戦略は中間階級の投票者を対象とし、(実際にはそれが社会的地位や心の安心を脅かすことはないが)「移民問題」への解決方法を持っているという妄想を中産階級に与えることである（これは「距離のある人種差別」と名付けられ、たとえ直接的に移民と触れることがなくても、フランデレン極右政党の人種差別的主張が中産階級に認められるのは、都市における社会的不公正に起因する差異や不平等、そして不安に気にすることない、都市での暮らしを可能にすることができるという妄想的な約束を主張するからである)。この場合には自由民主党とキリスト教人民党は投票数を奪われつつある(Swyngedouw & Beerten, 1999)。最後に、この二つの人種差別は「選挙における真の人種差別」において統合され、そのことは両者それぞれを強化し、人種差別とそれほど縁のない地域まで拡大している(こうしたことは「自国民に優先をEigen volk eerst」や「われらが母国の主人だBaas in eigen land」といった選挙スローガンを生み出すことにもなる)。

選挙データの多変量分析はフランデレンにおける伝統的な地政学的構造に比べて、3つの主要な変化を明らかにする。まず一つ目は、主にリベラル党員に賛同することでキリスト教人民党員の権力が喪失したことである。二つ目が社会党員の地理的特徴における変化であり、すなわち、社会党員が都市部において拠点を失い、個々の候補者が影響を持っているいくつかの拠点のみが維持されているのである。そして三つ目が、フランデレン全地域にわたるフランデレン極右政党の影響の劇的な拡大である（いうまでもなく、フランデレン極右政党はブリュッセルで少数派であるフラマン人の投票過半数を奪おうと試みている)。1999年選挙の地図的分析はこうした変動を明示し、政党と反都市主義とのかなり複雑な関係を解明している。

各選挙区において優勢である政党の空間的パターンを見ると、キリスト教人民党員が自由党員に代わったことを確かめることができる（図6)。キリスト教人民党が拠点を維持している地域はアントウェルペンケンペン、西フランデレン州、リンブルフ州の北部とメーチエスラントMeetjesland（東フランデレン州の北西部）に過ぎない。これらの地域は19世紀を通して、カトリック教の教育的ヘゲモニーが維持された地域とまさに一致する（図1)。しかし、これらは経済的にいえば周辺的な地域である上、人口密度も低い。フレミッシュ・ダイヤモン

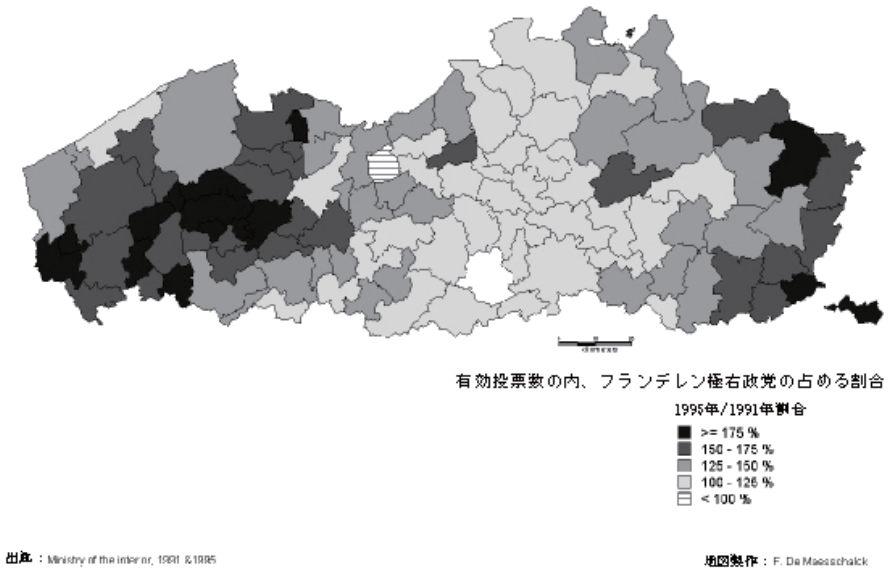

図5：1991年から1995年にわたるフランデレン極右政党への投票率の変化の割合

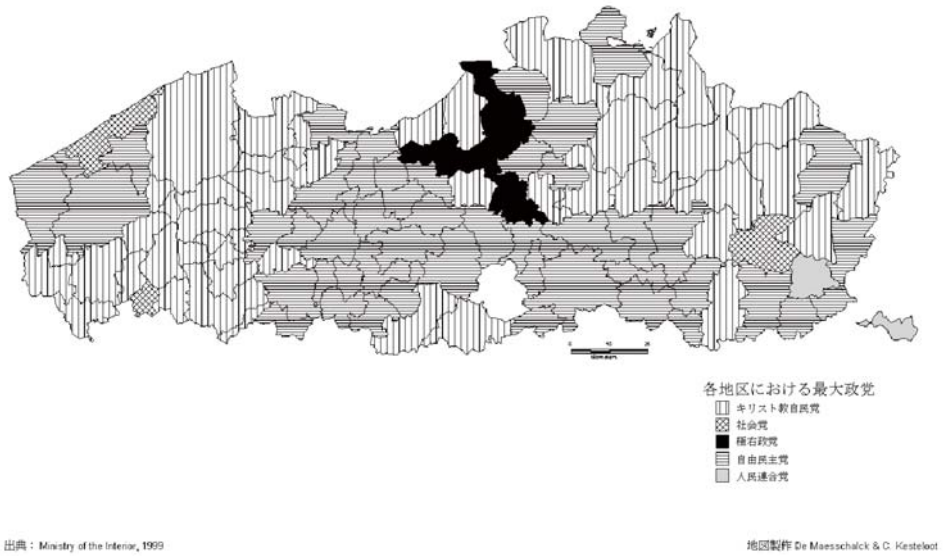

図6：1999年議会選挙の政治地図

ドとも呼ばれるフランデレンの中心部（アントウェルペン・ヘント・ブリュッセル・ルーヴェンの四角形）においては、キリスト教人民党は地域経済開発の影響をほとんど受けていない選挙区、すなわちワースランドの北部やブリュッセルの南西にあるパヨッテンラントゥ Pajottenland といった地域のみで影響力を維持している。こうしたキリスト教人民党の周縁化に対する唯一の注目すべき例外は、対応分析において既に述べたコルトレイクである。

他の選挙区の大部分において自由民主党が第一党となった。ヘントからリンブルフ州の南部まで広がる帯を形成するこの地域においては、カトリック主義から自由主義への転向といった運命を示唆するような歴史的構造を見いだすことはできない。しか

しながら、これはフランデレンの最も人口密度の高い地域であり、フランデレンの繁栄における強烈な発展を伴っている。また主な居住形態にも表れており、これは都市部でも地方でもない住宅団地や大銀行が必ず支店を持つ金融の中心地へと変容した小集落でもある。驚くべきことに、こうした生活様式と景観は、自由主義的な進歩的思考というよりも、むしろ先述したキリスト教民主政治からの結果であったのだろう。

この視点からは、キリスト教民主主義党員の衰退は、フランデレンの地政学においてそれほど主要な変動ではない。それに反して、社会党員の衰退がより甚だしいものとなっている。都市的社会主義はその魅力を完全に失ってしまったのである。アントウェルペンからブリュッセルまでの赤い地帯は茶色に変わった。ヘントは自由党員の手に渡り、極右であるフランデレン極右政党の憂慮すべき躍進をも目撃することになった。候補者個人の偶然の人気のおかげで維持できた地域（オーステンデ、リンブルフ州）以外に、社会党は工業化地域や都市部で選挙区を失ったのである（唯一の例外は西フランデレン州の南部における小都市ウェルヴィク Wervik である）（図 7）。一方で、1999 年の選挙における社会主義の地理はキリスト教人民党と極めて類似している。すなわち、両者は西フランデレン州とリンブルフ州の周辺部の残りの地域を共有している。

かつての社会党員とリベラル党員の砦となっていた地域は、現在フランデレン極右政党とフランデレン環境政党に支配されている（図 8・9）。フランデレン極右政党は通常、アントウェルペンからメヘレンに至る地域で 20％以上の投票率を獲得している。フランデレン極右政党への投票数の 15％はヘントとアントウェルペンの軸に沿って集まっており、それはローケレン（アントウェルペンとヘントの間にある繊維産業の小都市）とベリンゲン（リンブルフ州の旧炭鉱町）、そしてロンセ（南西部の境界に近い繊維産業の小都市）の移民労働者をめぐる緊張状態との影響が強い。なお、比較的最近において、ブリュッセルにいたモロッコ人がロンセに住みついているが、この背景には、モロッコ人が彼らの統合を加速させ、集住地域から移住することで社会的に促進しようとしている。

フランデレンではフランデレン環境政党が主要政党にはなっていないが、アントウェルペンの州全体およびヘントやルーヴェンといった都市において拠点をもっており、（アントウェルペンにおいてフランデレン極右政党があるにはかかわらず）フランデレン環境政党はそれらの選挙拠点を拡大させている。

周辺部の選挙区において極右政党への投票が相対的にかなり増加している一方で、フランデレン極右政党は都市の序列に従い、それから関連する郊外部に広がっていくという拡大戦略を持っている。しかしながら、フランデレン極右政党は都市部の政党ではない。すなわち、ここ数十年間にわたって経済危機やグローバリゼーションの結果に悩まされてきた、都市およびその住民の利害をフランデレン極右政党は擁護していない。剥奪地域における社会的排

出典：Ministry of the Interior, 1999　　出典：F. De Maesschalck & C. Kesteloot

図7：1999年議会選挙における社会党員への投票

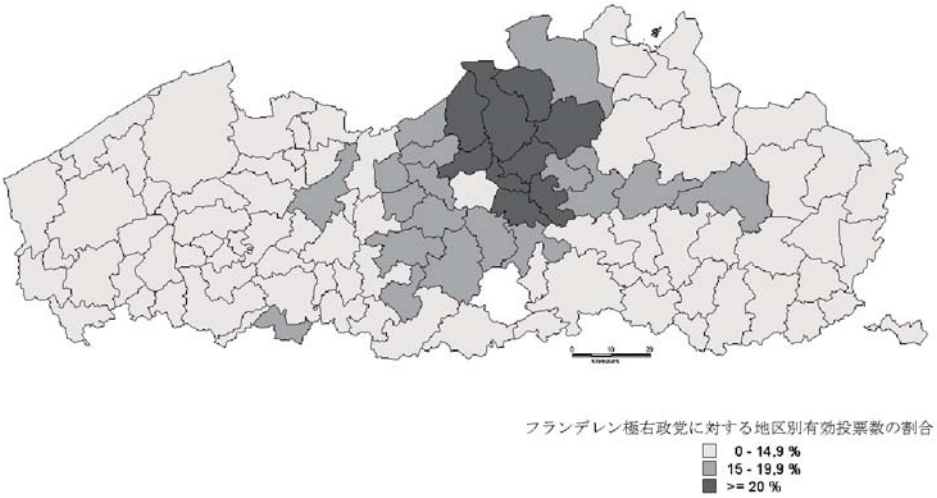

図8：1999年議会選挙におけるフランデレン極右政党（極右）への投票

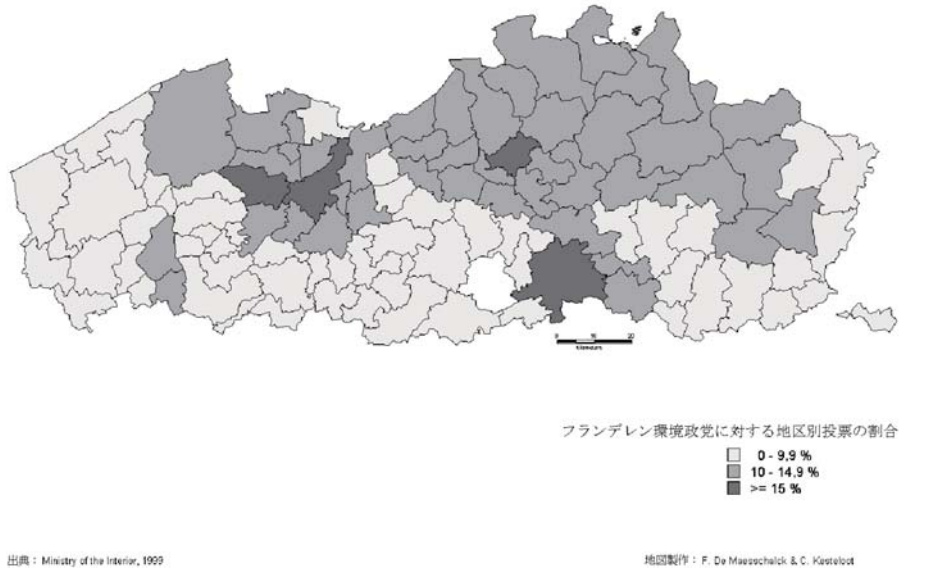

図9：1999年議会選挙におけるフランデレン環境政党への投票

除、そして失業問題や住宅困窮問題、若者の社会化の欠如といった関連する問題に取り組むために、フランデレン極右政党は（安全という口実のもとで）人種差別と弾圧を利用している。すなわち、その犠牲者を都市部から除外することで、これらの諸問題は解決していくかのようである。

こうした議論は、フランデレン極右政党をフランデレンの諸都市における「トロイの木馬」に仕立てている。どのみち、都市の魅力である移住や多様性、そしてすべての社会的文化的装置は問題としてみなされ、それに対する解決方法が純化と均質化なのである。長期的には、そのような観点はアーバニズムの崩壊を暗示している。結局、都市が存在する根本的な由来は持続的な再生と社会的多様性にある。都

市の将来のためには、移住が不可欠である（下記を参照）。

一方で、選挙結果の空間的分析は、フランデレンのフランデレン環境政党員を、戦間期においてともに政治的左派とみなされてきた、20 世紀におけるリベラル党員と社会党員のふさわしい後継者として全面に押し出している。自由民主党は、大多数のフランデレンの非都市中間階級の代表としてキリスト教人民党にとって代わっている。社会党員は疑いなく中道的側面を強調しすぎたために、都市との関係性を失っている。しかし、フランデレン環境政党が意識すべきは（そして投票者に明確にすべきは）、自身が都市を舞台とした解放と進歩の長い歴史の脈略を活かすことができる政党だということである。社会党だけが唯一、フランデレン環境政党員の事業に協力することができるが、それが可能となるには、前の選挙結果を取り戻すことが前提なのである。

2000 年 10 月の市会議員選挙は、都市それ自体が新たな政治の論点になっていることを強調した。反都市的なメンタリティの後退的な効果もさることながら、都市それ自体および都市における様々な社会的問題をフランデレン極右政党に託すことの危険性も極めて重大な問題なのである。フランデレン極右政党はフランデレンの都市においてその地位を強めており、特にアントウェルペンでは全投票数の 3 分の 1 に達している。多くの政治アナリストたちは、アントウェルペン郊外で強さを示した極右政党の投票結果に驚いた。この現実は「距離のある人種差別」の過程が未だに把握されていないことを明らかにした。こうした選挙選択は「都市における連帯」よりも「都市における抑圧」への選好を反映している。すなわち、これらの有権者たちはインナーシティにおける公共施設を全く危険なく利用し続けるために、都市問題の源を断つ社会・経済的政策よりも、都市の若者に対するより厳しい取り締まりや法的措置を好んでいるのである。インナーシティの警察の資金はそこに居住する貧困世帯から主に拠出されており、一方で代替的な政策は連邦政府や地方政府レベルでの資金で成り立っている。2000 年の選挙における社会党の（若干の）復活は意外であったが、社会党は極右という危険性に対峙する、都市部における政治的連合の成立に貢献できる立場になりうるだろう。権力を取り戻すために、社会党は大規模な再生プロジェクトを計画している。そうした再生を果たすためには、社会的戦略と政治的戦略の二つの側面に区別することができる (Johnston, 1990)。一つ目の社会的戦略として、社会党員は従来の対象であった労働者を取り戻すために取り組むとともに、他の階級にも対象を拡大しようともしている。社会党は労働者および小企業の従業員があまりにも選挙基盤が小規模すぎるために、明らかに二つ目のオプションを選択している。第二の政治的戦略として、社会党は従来の問題に取り組むか、それとも（イギリスの労働党が「第三の道」を生み出したように）新たな政治的プログラム取り組むか、どちらかを選択しなければならない。こうした二つの選択肢のコンビネーションを実現することはほとんど想像できない。もしそうなれば、社会党は政治的スペクトラムの中心にいつづけることは難しく、左翼と右翼どちらに対しても選挙基盤を失うような大きなリスクが伴われるのである。それに対して、特にブリュッセルとワロンでのワロン環境政党 Ecolo（フランス語圏における環境政党）の成功に比べれば、フランデレン環境政党の結果は期待外れであった。たとえ、これが弱体化の理由ではないとしても、フランデレンにおける地政学的な位置づけを強化するために、フランデレン環境政党はアーバニズムという戦略をとらなかったのである。

希望としてのアーバニズム

マルクス主義的都市地理学および社会学の研究において、都市は社会的剰余の空間的集中として見なされる (Harvey, 1973)。ルイス・ワースによれば、都市は「規模」・「密度」・「異質性」によって定義される (1938)。ワースはこれらの特徴に基づいて都市的行動を探求する際に、主に都市のネガティブなイメージを作り上げたが、これらの特徴をハーヴェイの空間的集中過程に組み合わせると、アーバニズムの本質において適切で、非常にポジティブな洞察力を生み出すことができる。ワースの定義した「密度」は集中を示し、「規模」は富の蓄積による結果であり、そして住民が直接的な自給自足から解放されることで「異質性」はもたらされる。結果として、都市は「考察」「創造」「想像」「執筆」「発明」「運営」「決定」といった能力を持つ人々を集めるのである。こうした人々は、象牙の塔にとどまっておくのではなく、情報やコミュニケーション手段が集中する場所に群がる方が効果的である。

このようなアーバニズムの本質に関するごく基本的な記述は、アンチ・アーバニズムの社会的結果や、フランデレンにおける極右の政治的拡大の危険

性を明らかにする。ぶっきらぼうに言えば、アンチ・アーバニズムはフランデレンにおいて知的貧困をもたらすことになった。こうした問題は「対抗宗教革命」の時代まで遡ることができる。当時、フランデレンの知的階級の多くは北へと逃げだしていったのである。社会言語的な境界は標準語としてのオランダ語の発展を妨げ、その言語はすべての方言とともに農夫やその後の労働者階級のステータスと関連することになった。しかしながら、ブルジョア階級はフランス語を採用し、第二次世界大戦後においてすら、いかなる社会的昇進もフランス語への転換なくしては不可欠であることを意味した。したがって、まさに都市部で栄えていたフランデレンの知的な可能性は、フランス語圏文化に深く組み込まれたのである。

それ以来、フランデレンの知的階級に含まれる者は、たいていは非都市部の区分された居住環境の特徴のせいで不能に陥った (Laermans, 1993)。人口の多様な層を都市外部へ解放させた執念の 120 年間は、コミュニケーションや情報、そして社会的関係の分割を導いたのである。それはまさに、均一で、出来合いの、そして融通がきかず、家父長的な常識を疑わない「リーダースダイジェスト的な知」のようなものを導いたのである。フランデレンの中間階級は、フェルメッテ（疑似的な小規模農家住宅）[13] に分散居住することで、自分たちの好奇心や創造性を満足させるために都市部に向くことはなかった。

フランデレンをさらに解放しようとする力やより輝かしい知識人の将来を求めることは、近年のフランデレン地域の経済的および社会文化的な歴史に関係している。フランデレンに健全な知識階級は今ようやく現れつつある。60 年代から 70 年代においては、大学生のおおよそ二割から三割が高等教育を受けた両親を持っていたが、現在においてそれは多数派となっている。さらに、1960 年と 1991 年の間にかけて、大学生数および学位取得者数は五倍に増加した [14]。このような若い（能力のある）知識人たちの願望を実現するためには都市が不可欠となっており、不明確であるが、いくつか待ち望まれている変化の兆候が既に見られている。例えば、ルーヴェン・カトリック大学の学生組織は、ますますブリュッセルに足を伸ばしており、卒業後はルーヴェンに残るよりもブリュッセルに移住するケースも増加している。ブリュッセルに住む大学生のために生活基盤を提供しようとするアイデアが現在考慮されており、大学や短期大学のコンソーシアムは既にブリュッセルにカルチエ・ラタン（Quartier Latin）のような地区を生み出している。比較して言えば、外国人もブラバント州の郊外よりもブリュッセルを選択している。すなわち、これらの外国人には、60 年代から 70 年代にかけてブリュッセルの郊外に住んだ最初の EU に勤務する役人の第二世代を含んでおり、さらに EU とその権力拡大に応じる形で EU 官僚たちのグループが拡大したことで、また他のセクターにおいて新しく生み出された雇用増大の影響で、より若いニューカマーの増加もみられている（Kesteloot et al, 2000）。

反都市的な政治に暗黙裡に含まれる富の地理的拡散ということは、一方で、都市部、特に当初から恐怖（最近の言葉でいえば「不安」）という非難をもたらした 19 世紀に形成されたベルトにおいて、貧困が集中することを意味している。（リンブルフ州の炭鉱地域を除いた大部分である）都市の移民労働者は元来、フラマン人の社会上昇傾向によって生み出された経済的、空間的なギャップを占めていた。したがって、フラマン人の中間階級の拡大やその非都市圏への移動によって、移民は都市の労働市場における低賃金かつ単純労働の職に就くことになり、放棄されたインナーシティの労働階級地区に集中することになった。都市の財源が主にそれぞれの地方の税収によって決定される場合、これらのインナーシティと大規模な郊外の間の社会空間的なコントラストは劇的なものである（De Brabander et al, 1987）。すなわち、都市で仕事を見つけ、かつ都市のアメニティを利用することで利益を得ている人たちは、郊外の市町村で地方税を納付しているのである。一方で都市を利用する者に共同財やサービスを提供している都市自治体は、居住人口の減少のために財政基盤の衰退問題に直面している。60 年代からの継続する脱工業化、70 年代から 80 年代にかけての経済危機、90 年代の社会空間的分極化は、既存の都市労働階級に貧困や絶望をもたらした。こうした状況の中、インナーシティにおける有権者住民は、その反都市的な特徴を知らずに、フランデレン極右政党のスケープゴートや「安全」の言説の虜になっている。同様の社会空間的なプロセスは、都市と非都市との疎遠を生み出しており、フランデレン極右政党はそれに乗じて、郊外で躍進した（Kesteloot & De Decker, 1992）。フランデレンの社会空間構造とその地政学的変容の研究によると、インナーシティ地区外における極右の台頭は有権者の一貫性のない行動の結果だけではなく、フランデレン極右政党による特別強い説得力の結果でもない。こうした状況はフランデレンの中間階級に深く

根付いた、都市と差異が相互に関係している恐怖の兆候が原因なのである。経済危機は社会的排除の急増を引き起こし、それはフラマン人の考え方において二重の他者性（つまり、都市と移民者）を形成した。フランデレン極右政党は都市に対する恐怖と移民者に対する恐怖の相互強化を巧みに利用している。しかしながら、極右との闘争はたんなる人種差別に対する抵抗だけではなく、徹底的に反都市的なフランデレン地域において都市やアーバニズムを求める闘争も必要であることを認識した政治的批評家は少なかった。これこそがインナーシティの近隣地区で発生するスケープゴートのスタンスに対する唯一の解決方法なのにである。

注

1) フランデレンとブリュッセルの関係を理解するために、ベルギーの連邦制の仕組について若干の説明が必要である。ベルギーは「フランデレン地域」、「ワロン地域」、「ブリュッセル首都圏地域」の 3 つの領域から構成されており、それぞれの地域は独自の政府がある。さらに、ブリュッセル首都圏においては、フランス語共同体とフラマン語共同体が重なっている（ワロン地域の中には小さなドイツ語共同体もある）。フランデレン地域政府とフラマン語共同体政府は合併している。
2) ブリュッセルの人口は 95 万人であり、その内 35% が貧困地域に住んでいる。一方で、アントウェルペンの人口は 45 万人であり、その内 21% が貧困地域に住んでいる。ヘントの場合は、全人口 22 万 5 千人の 16% は貧困地域に住んでいる。しかし、Social Impuls Fund はブリュッセルのフラマン語共同体だけのための資金であると言える。言語に関する国勢調査は存在しないが、ブリュッセル人口の 15~20％がフラマン人であると考えられている。
3) Vlaams Blok 党は極右的なフランデレンの国家主義党である。ブリュッセル首都圏政府は当地域のフランス語共同体とフラマン語共同体の二つの多数派から形成されている。フラマン語共同体の中の多数派として、フランデレン極右政党はブリュッセル首都圏政府を妨げ、ベルギー連邦制の仕組を危うくすることができた。最近、フランデレン極右政党の議員の 1 人がブリュッセルを将来のフランデレン国家に加えるために、ブリュッセルをめぐる通信をブロックし、ブリュッセルを経済的に窒息させるような提案を行った（地理的にブリュッセルはフランデレン地域に囲まれている）。
4) 興味深いことに、ワロンの工業がブリュッセルの銀行や株主に支配されていたために、ワロン人はブリュッセルに対して同じような嫌悪感を持っている。彼らにとって、ブリュッセルはワロンの工業の不景気に対して責任を持っているのである。
5) これまでの文献では、アンチ・アーバニズムは工業化や都市化よりも、むしろ西方への地方植民地化を伴って、国民国家を成立させたアメリカ合衆国と主に結びつけられている。現在のコンテクストでは、それは大都市への一般的嫌悪感として言及され、工業都市への批判と一致している。しかし、後者は必ずしも反 - 都市とはいえない（Choay, 1965）。
6) 主に東フランデレン州の都市に限っていくつかの例外がある。その中にヘントは最も重要な都市である。貿易組合と他の労働者組合の施設はヘントにあったが、ワロンのように地方政治的な影響がなかった。
7) この危険性は 1875 年以降、ほとんどのベルギーの大都市におけるオスマンニゼーション Haussmannisation プロジェクトに由来した。公衆衛生の結果は目を見張るものがあり、このプロジェクトはブルジョアジーを都市に戻す目的があったが（あまり効果はなかったが）、副作用として労働階級の大部分が都市から離れていった（残りの労働者は残された労働者階級の地域に集中していた。ブリュッセルの場合、Franken 1988 を参照）。
8) アムステルダムの人口はブリュッセルの 4 分の 1 だが、通勤圏はブリュッセルの 4400 km² に比べ、僅かに 1000 km² である。機能的な都市システムのエリアと都市密集地域の人口の間の比率は、ブリュッセルの場合は都市居住者一人当たりに 0.53ha であり、これに比べ、フランクフルトは 0.33ha、パリは 0.22ha、リールとルールとロンドンは 0.2ha 以下である。ランドスタッドホランドの比率は都市居住者一人当たりに 0.11ha である（Vandermotten et al, 1999 の計算）。
9) この構成についての詳細な記述は De Smet & Evalenko (1956) と Vandermotten et al (2001) を参照している。
10) 最近の選挙の前に、民族党は「社会自由主義」を弁護するために新たな政党（ID21 党：訳者注、政党名は「21 世紀の新たなアイデア ideeën voor 21ste eeuw」と「総体的な民主主義 integrale democratie」を示す）と同盟を結んだ。
11) ヘンク市の選挙地区とリンブルフ州の採炭地域の中心は「都市圏」に含まれている。
12) ここでの「移民 migrant」とは 1960・70 年代の移住労働者に端を発する集団のことである。「移民」という言葉自体は、未だに移動していることを意味するが、二世代と三世代もベルギー国内に滞在しており、移住労働は行われていない。フランデレン極右政党は「移民」よりも「招かれた労働者 guestworker」を好み、かれらの義務が果たされると母国に帰るべきであるという意味合いを強調している。
13) これは分散した居住地区でより頻繁に見られる建築スタイルを示した、文字通りオランダ語の用語で、フランデレンの農村の中核部の孤立した小規模の農家をも広く意味するものである。あたかも都市への恐怖は、消滅したものの神話として残っていた田園風景への偽りの支持を本質化するものであった。(「フェルメッテ」スタイルに関する精神分析はいまだにおこなわれていないが)。

14) ルーヴェンカトリック大学（フランデレンの最大の大学）に関しては、両親が高等教育を受けた学生の人数は1964年には26%であり、1995年に61%になっている。学生数の一般的な増加とともに、こうした集団は1995年において6倍に増加しており、その数は1万5千人以上にあたる。また、1964年に男子学生が女子学生と比べて多数であったが、90年から均等なバランスとなっている（Smedts, 1998）。

文献

CHOAY F. (1965), L' urbanisme, utopies et réalités, une anthologie, Paris, Editions du Seuil.

DE BRABANDER G., VERVOORT L. & WITLOX F.(1987), Metropolis, over mensen, steden en centen, Leuven, Kritak.

DE MAESSCHALCK F. (2000), «Electorale gografie van het Vlaams Blok. De ruimtelijke evolutie van de verkiezingsuitslagen van 1981 tot en met 1995», De Aardrijkskunde, 24, 1-2, p.21-36.

DE RIJCK T. & VAN MEULDER G. (2000), De ereburgers - een sociale geschiedenis van de Limburgse mijnwerkers, Berchem, EPO.

DE SMET R. E. & EVALENKO R. (1956), Les élections belges. Explications de la répartition géographique des suffrages, Bruxelles, Editions de l' Université de Bruxelles.

FRANKEN E. (1988), «De O.L.V.-ter Sneeuwwijk: een Haussmannisatieproces te Brussel», Tijdschrift van de Belgische Vereniging voor Aardrijkskundige Studies, 2, p.285-302.

GERARD E. (1998), «The Christian workers' movement as a mass foundation of the Flemish movement», in DEPREZ K. & VOS L. (eds.), Nationalism in Belgium, shifting identities 1780-2000, Antwerp, Houtekiet, p.127-138.

GOOSSENS L. (1983), «Het sociaal huisvestingsbeleid in België sinds 1830», KONING BOUDEWIJN STICHTING (ed.), Sociaal woonbeleid, Brussel, Koning Boudewijn Stichting, p.12-31.

GREENACRE M. & BLASIUS J. (eds.) (1994), Correspondence analysis in the social sciences, New York, Academic Press.

HARVEY D. (1973), Social justice and the city, London, Edward Arnold.

JOHNSTON, R.J. (1990) «Lipset and Rokkan revisited: electoral cleavages, electoral geography, and electoral strategy in Great Britain», in JOHNSTON, R.J., SHELLEY, F.M. & TAYLOR, P.J. (eds.), Developments in Electoral Geography, London, Routledge, p. 121-142.

JOYE P. & LEWIN R. (1967), L' Eglise et le mouvement ouvrier en Belgique, Bruxelles, Société Populaire d' Editions.

KESTELOOT C. & DE DECKER P. (1992), «Territoria en migraties als geografische factoren van racisme», in DESLÉ E. & MARTENS A. (eds.), Gezichten van het hedendaags racisme, Brussel, VUB-Press, p.69-108.

KESTELOOT C., PELEMAN K. & VAN DER HAEGEN H. (2000), «The changing geography of foreigners in Belgium, 1991-1999: the impact of population and nationality changes», Tijdschrift van de Belgische Vereniging voor Aardrijkskundige Studies, 69, 2, p.313-348.

LAERMANS R. (1993), De lege plek: opstellen over cultuur en openbaarheid in de provincie Vlaanderen, Leuven, Kritak.

MOUGENOT C. (1988), «Promoting the single family house in Belgium: the social construction of model housing», International Journal for Urban and Regional Research, 12, p.531-549.

SAEY P., KESTELOOT C. & VANDERMOTTEN C. (1999), «Unequal economic development at the origin of the federalisation process», in DEPREZ K. & VOS L. (eds.), Nationalism in Belgium, shifting identities 1780-2000, Antwerp, Houtekiet, p.165-176.

SMEDTS, D. (1998), Evolutie in de sociale herkomst van de studentenpopulatie K.U.Leuven 1964-1995, Leuven, K.U.Leuven

SMETS M. (1977), De ontwikkeling van de tuinwijk-gedachte in België, een overzicht van de Belgische volkswoningbouw 1830-1930, Liège, Mardaga.

SWYNGEDOUW E. (1990), «L' espace, le fordisme et le Limbourg», in MORT-SUBITE, Les fractionnements sociaux de l' espace belge, une géographie de la société belge, Bruxelles, Contradictions, n° 58-59, p.115-151.

SWYNGEDOUW, M. & BEERTEN R. (1999), De fragmentatie van het kiezerskorps in Vlaanderen. verschuivingen 1991-1995 en 1995-1999, ISPO Bulletin 1999/34, Leuven, Interuniversitair Steunpunt Politieke Opinieonderzoek.

TAYLOR, P.J. (2000), Political Geography, world economy, nation-state and locality, Harlow, Pearson Education.

VAN DER HAEGEN H. (1982), «Honderd jaar pendel naar Brussel, evolutie en evaluatie», De Aardrijkskunde, 2, p.119-128

VANDERMOTTEN C. DECROLY J.M., DESSOUROUX C. & ROUYET Y. (2001), «Permanences et ruptures dans les temps longs de la géographie électorale de la Belgique», Belgeo, 1, 1, p.7-39.

VANDERMOTTEN C. , SAEY P. & KESTELOOT C. (1990), «Les fragments de la Belgique: la Wallonie et la Flandre existent-elles vraiment? », in MORT-SUBITE, Les fractionnements sociaux de l' espace belge, une géographie de la société belge, Bruxelles, Contradictions,

n° 58-59, p.7-67.
VANDERMOTTEN C., VERMOESEN F., DE LANNOY W. & DE CORTE S. (1999), Villes d' Europe. Cartographie comparative, Bruxelles, Bulletin du Crédit Communal de Belgique, 53, n° 207-208.
VANLAER J. (1984), 200 Millions de voix, une géographie des familles politiques européennes, Bruxelles, Société Royale Belge de Géographie et Laboratoire de Géographie Humaine de l' Université Libre de Bruxelles.
WIRTH L. (1938), «Urbanism as a way of life», The American Journal of Sociology, 44, 1, 1-24; reprinted in PRESS I. & SMITH M.E. (eds.) (1980), Urban place and process, readings in the anthropology of cities, New York, Macmillan, p.30-48.
WITTE E. (ed.) (1993), De Vlaamse Rand, Brussel, VUB-Press.

本論文を訳出するにあたって

フランデレンの都市と農村地帯の景観は、政治の舞台で展開する空間的戦略やそれに関連する階級闘争によって形成されている。特に産業革命以降、主要な政党は地理的な支配を維持するために景観を巧みに創造してきた。その際、主要な政党は起こりうる抵抗を防ぐために、労働階級を郊外周縁部や都心から離れた農村部に分散させてきたように（それは現代のフランデレンの住宅景観にあらわれている）、都市の位置づけは政治において重要な対象であったのである。こうした事実を踏まえ、訳者らは本論文がフランデレンの景観をめぐる政治的背景を分析しているだけではなく、現在も根強い「反都市的感情」と上記の空間戦略を関連付けているという理由から、本論文を訳出するに至った。さらに本論文は、近年、極右政党が政治的戦略として利用している「反都市的感情」の文化的な影響を考察しているが、都市の存在の重要性をめぐる政治的アジェンダを描き出している点でも、本論文は重要な研究論文であると考えている。

なお、本論文で多くの場所や地域名が言及されている。ベルギーでは複数の言語が存在するが、訳者らは当該地域で話されている言語（本稿の事例の場合、ほとんどがオランダ語）に従い、地域名をカタカナ表記している。また、政党名については日本語で書かれた先行研究を参考にしている（若林広「ベルギー国家の再編—政党政治の変容期における最近の展開—」東海大学紀要 . 教養学部 38, 2007, pp. 229-243）。上記に沿って、論文中の地図については適宜翻訳しているが、技術的な理由から表に含まれる地域名や政党名は原文通り表記している。

謝辞

本論文の訳出にあたって、特に統計に関する専門用語の翻訳において泉谷洋平氏の協力を得ました。ここに記して謝意を表します。